要求されるため、あらためて基礎医学の大切さが身にしみる場面にも出くわします。

少々個人的な話で恐縮ですが、私は外国語学部英語学科という文系の大学を卒業したあと、外資系の医療機器メーカーで営業の仕事に携わっておりました。以前の大学では講義で学ぶことが実生活で役に立つシーンが少なかったため、残念ながら大学での講義の記憶はほとんど残っておりません。それと比較すると、医学科の講義は学んだことが実際の医師の仕事に活かされてくるため、実戦的な教育だとうらやましく思うことがあります。

11月下旬には体験実習が予定されており、県内の中核病院や施設に1グループ３名程度で派遣されます。これは、１年次の救急車同乗実習と同じ位置付けで、いわゆるearly exposureとして学生のモチベーションを上げるとともに、医師としての自覚を芽生えさせる貴重な体験になることは確実だと思います。

臨床医学の講義や体験学習をとおして、私たち３年次の学生たちも自分がどういう医師になりたいかが少しずつ明確になる時期に差し掛かっている気がします。大学の主催する「後期研修説明会」などにも顔を出すクラスメートが増えてきました。あまり勉強ばかりしていても精神衛生上よくありませんが、自分の将来の姿を想像しながら、日々の学生生活を過ごしていきたいと思う今日この頃です。

２年生の近況報告

柳　田　明　希（２年次）

私たちは、９月末から解剖実習をしています。私は２年次のカリキュラムの中で一番解剖実習を楽しみにしていました。しかし、楽しみにしていたのと同時に緊張や不安もありました。最初に御献体を前にメスを持った時少し手が震えてしまいましたが、少しずつ慣れてきて今では班の仲間と協力しながら実習に取り組めています。解剖実習では実際に見て触ることによって、本で学習するより何倍も理解しやいと感じています。「本当にこのような形、触感なんだ」と納得することもあれば、「実際はこんな風になっているんだ」と今までの思い込みが覆されることもあります。一見は百聞に如かずとは正にこのことだなと思います。実習が終わると、人間の体内の構造を直に観察できる機会はなかなか無いと思うので、残りの実習を大切にしていきたいと思います。

2011年もあと残り一カ月半となりました。振り返ってみると東日本大震災が起こり、国外でも洪水や経済危機など多くの暗いニュースが流れた一年でした。そんな中、私は大きな影響を受けず大学生活を送れていることに幸せだなと改めて思います。そのように思いつつも、恥ずかしながら実際の私は目の前の試験に追われて必死になり、小さいことに悩んだりもしてしまいます。でも、感謝の気持ちを忘れないようにしたいです。

２年次も気がつけば半分以上が過ぎました。先輩方が６年間なんてあっという間だとおっしゃっていた意味が分かってきました。勉強はもちろん学生である今しかできないことを一生懸命に取り組んでいきたいと思います。拙文失礼致しました。

１年次近況報告

垣　本　啓　介（１年次）

時が過ぎるのははやいもので、１年次も残すところあと少しとなりました。入学して以来、先輩方が企画してくださった新歓イベントのおかげもあり、時間と共に私達31期生の絆も深まってきています。

さて、一年次では救急車同乗実習が行われている最中です。私は、10月に西消防署で実習をさせていただきました。この実習は一年次が実際の医療現場に触れることの出来る貴重な機会ということもあり、期待と好奇心を胸に実習に臨んだのですが、救急の現場はとても忙しく、次々と出動命令がでる様子に驚きを隠せませんでした。患者さんも多様で老若男女問わず、重篤な患者さんもいれば、本当に救急車を呼ぶ必要があるのか、というような容態の患者さんもおられました。患者さんの容態がどうであれ、素早くテキパキと行動し、患者さんに優しく接する救急救命士の方々に尊敬の念を抱くと同時に、現在の救急医療に潜む問題の深刻さを感じました。また、医療というのは、医師だけでなく多くの人々の支えられていることを実感でき、充実した実習となったと思います。

話題は変わりますが、現在世間ではTPP参加を巡って激しい論争が繰り広げられています。医療業界も無関係ではなく、TPPによって医療に競争がもたらされるのではないかと報道されていました。競争で医療がどうなるのか私には分かりませんが、私達が患者さんのために、良い医師にならねばならないことだけは確かです。そうすれば社会がどう変わろうと患者さんから信頼され、患者さんに寄り添える医師であり続けられると思うのです。そのためにも大学での学びを大切にし、部活動などの課外活動を通じて精進していきたいと思います。